



居場所づくりとスタッフの魅力

萩原 建次郎（駒澤大学講師）

居場所づくりは 多様なひと・もの・自然との かかわりの場づくり

地域子ども教室と居場所

居場所づくりの具体的な取組は、民間、行政を問わず多様な展開を見せている。とくにそれを加速化させているのが平成16年度からスタートした文部科学省「子どもの居場所づくり新プラン」だ。

これを受けて全国各地の地域の人々と公立小中学校の連携によって地域子ども教室が試行錯誤ながらも展開されている。このようななかで、居場所づくりは子ども・若者の学びや育ちにどのような魅力と可能性を秘めているのか。また居場所を支える大人やスタッフはどのような役割をもってそこにいるのか、いくつかの事例に学びつつ整理してみたい。

「居場所」を子どもたち・若者たちの目線からとらえるとき、人やモノ、自然とのかかわりのなかで自分らしくいられる場所ととらえるだろう。多様なかかわりの場があってこそ、自分らしさを生み出し続ける居場所がそこにできる。居場所づくりは多様なかかわりのなかで、子ども自らが自分らしさを生み出せる関係づくりとっていい。

「やりたいこと」と「できる自分」

例えば町田市子どもセンターばあん^{*1}には「欲張部」というのがある。企画運営はすべてセンターにやってくる中高生たちによる自主的な活動だ。

ここではとにかく「自分たちでやってみたい」と思い立ったことをできるかぎり実行、実現してしまおうというものだ。「自転車で町田から江ノ島まで行ってみよう」、「オリジナルパスタで料理対決してみよう」、「自分たちで『ばあん』のプロモーションビデオをつくっちゃおう」「合格祈願をかねて東京下町めぐりをやってみたい」。なかには個人旅行の扱いとはいえ、ここで知り合ったメンバーが発案して日本海までの315キロを自転車でチャレンジし、実現させている。

このような「やりたいこと」を自由に発想し、それを可能な限り実現させていくなかで、知恵をしばり、自然と格闘し、仲間と一緒に励ましあい、楽しみあい、自分の限界にチャレンジしていく。そのときの達成感。そこに湧き起こる自信と、「できる自分」という新しい自分の発見。

ときには、仲間とのかかわりに葛藤しながらも、和解し、許しあえたときの喜びと安心感。互いが互いを認めあい、受け入れあえたときの深い信頼感がそこにある。

*1：町田市子どもセンターばあん（P19参照）

異質な他者とどう生きるか

京都市南青少年活動センター^{*2}でも、高校生から30歳未満の青年までを対象に、居場所づくりへのサポート事業を展開している。いくつかある事業のうち、ロビースペースを中心に「フリースペース」という場を、月に2回開いている。ここには不登校の青少年、引きこもりがちで人とかわるのが苦手という若者が、本人や家族、児童相談所などの機関の紹介などをきっかけに参加してくる。ここもはじめにプログラムありきではない。

そのとき来ている参加者の希望を大学生ボランティアスタッフ（センターでは「ロビースタッフ」と呼んでいる）が汲み取りながら、その場で活動をつくり出している。

例えば1人の参加者が「体育室でなにかしたい」ということから、スタッフが「じゃあなにしようか」とたずねる。だまっていれば別の参加者やスタッフも一緒に考えながら「じゃあドロケイやろうか」「ハンカチ落としはどう?」「卓球もできるよ」など、ひとつの思いの実現に向けたいくつもの共感的な言葉が重なっていく。

ときには、別の参加者から「違うことしたい」という提案もでてくる。そのときには、「じゃあどうするか」とまた話し合う。さまざまな思いをもち、異なる他者が集まったなかで合意をつくり出すプロセスそのものもスタッフは大事にしていく。

異質な他者と共にこの社会でどう生きるか。その子ども・若者の持てる力と知恵で、どのように他者と関係をつくるか。最初はスタッフのサポートを得ながらも、徐々に自分の思いに気づき、それを言葉にし、相手に伝え、相手からの思いを受け止めることができるようになっていくプロセスがそこにある。

*2: (財)京都市ユースサービス協会
京都市南青少年活動センター
〒601-8441 京都市南区西九条南田町72
Tel & Fax. 075-671-0356
E-mail: i-basyo@nike.eonet.ne.jp
<http://www.joho-kyoto.or.jp/f-machi/100/dekakeyo/290/>

